

＜北海道熊研究会 会報＞ 第63号 2016年 6月 6日

ご意見ご連絡は下記の email へどうぞ

e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

既報会報の1～62号は Website に「北海道野生動物研究所」と入力しご覧下さい

「北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association の活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

＜秋田県で、月輪熊U.thibetanusによる死亡事故が 3 件発生＞

① 第1 の事故 5月20日朝、高瀬佐市さん79歳が、鹿角市十和田大湯の竹林のタケノコ採りに行き、翌日、7時頃、顔や上半身に引っ掻き傷を受け死亡しているのを、発見した。

② 第2 の事故、同じ竹林に、5月22日朝、高橋昇さん78歳は、妻とタケノコ採りに行き、午前7時半頃、棒(イブ)は不明)を持ち、熊と対峙している昇さんに、妻は逃げるように、言われ、現場を離れ、急を知らせ、現場に戻ったところ、やはり、顔や上半身に引っ掻き傷を受け死亡しているのを、発見した。

③ 第3 の事故、前記 ①と② と同じ大湯であるが、①と②の現場から、2～3 km 離れた地所で、5月25日早朝に単身でタケノコ採りに出掛けた高谷善孝さん65歳が、全身に多数の引っ掻き傷と咬まれた傷(?)を受け、死亡しているのが、30日午前11時頃発見された。

前記①と②の情報は「小坂町役場 総務課長の 成田 祥夫さん」に依るもの、③は門崎が収集した資料に基づく。

＜門崎の見解＞

①～③の3件の、加害熊は、事故の場所が 3km圏内で生じて居る事、被害者の受傷部位がほぼ全身に及びている事、被害発生時刻が、いずれも午前中である事、の同似性から、私は同一熊に依ると見る。襲った原因は、人をその場から排除すべく、襲ったものであろう。

＜月輪熊が人を襲う原因＞

月輪熊が人を襲う原因は、2大別される。

① 排除の為(不意の遭遇、縄張りの占有、何かを得るため、猟師への反撃、等)

② 戯れの為

熊の場合は、①と②の他に、③として、「人を食う為に襲う事がある」。

<被害の予防>

熊が居るかも知れない場所に、行く場合には、アイヌが隣家に行く場合でも、熊との遭遇そして襲われての生還のために、タシロ（先が尖った鉈に似た刃物）やマキリ（小型の刃物）を、常に携帯した習慣を見習うべきである。

それ故に、私は、皆さんに、「ホイッスルと鉈の携帯」を勧めるのである。熊が人を襲えば、その熊は追跡され殺されるし、そうでなくとも、人身事故があれば、熊は怖いもの、居ない方がよいものとの世論を醸す事になる。

<実際の行動>

- ① 熊に己が見つけれられる前に、自分が先に熊を見つける様な、歩き方、進み方をする事。
- ② 時々、ホイッスルを吹く。ホイッスルは軽く、音も遠方まで、届く、これで、熊との遭遇も回避できる。音が出っぱなしのラジオ等は、辺りの異変に気づきづらいので、だめである。
- ③ 熊と遭遇した場合は、熊に話し掛ける事だ。
- ④ 熊がどうしても、離れて行かない場合は、怒鳴り付ける事だ。
- ⑤ 熊が襲い掛かって来た場合は、鉈で、熊のどの部位でも良いから叩き付ける事。襲い来るものに対し、無抵抗はひどい場合は殺される。これは、人、獣などに依る攻撃から、我が身を守る共通した総ての場合の、鉄則である。

「会報の読者士」から

会報 62 号で、紹介した「北海道新聞の社説」について、次のような所感が寄せられました。

掲載の社説は「熊管理を目論む集団のための記事」と受けとめました。

ごくごく近くに熊がいても、何ら問題もなく、何の騒ぎも起きていない地域には、こうした熊管理を目論む集団が入ってきていないので、熊も人も平穏な暮らしが成り立っています。

熊のことを知らずに、数字あわせのためだけに、命とはどう言うものかも考えず、無差別に捕殺を繰り返す異常な熊管理を、北海道や国が容認していることが不思議でなりません。

熊の専門家が地方に不在のような言い方をしている社説者には呆れます。地方には長い歴史と経験に裏打ちされた熊に詳しい専門家が沢山おり、熊を読めない、知らない行政に関与している熊管理集団を、しっかりと見抜いて、あざ笑っていることを知らないのでしょうかね。

熊の智慧能力をしっかりと受け止めてこそ、熊との共存の道が拓けると思います。